

郷土博 通信

No.11

2018 春



輝安鉱 (解説 10 頁)

CONTENTS

■ 輝安鉱	1	■ 「江戸中期の讃岐の名医 合田強」	7~9
■ 共済会100周年を迎えて	2~3	■ 「輝安鉱」について	10
■ 展示室紹介	4~6	■ INFORMATION	10

鎌田共済会は設立100周年を迎えました

鎌田勝太郎によって設立された財団法人鎌田共済会は、平成23年(2011)4月に新公益財団法人制度のもと、従来の事業内容を継続・実施する公益財団法人へと移行し、本年3月に設立100周年を迎えました。

これまで鎌田共済会の活動を支えてくださった郷土の方々の多大なご協力と、当会運営に携わってきた多くの先人の努力のおかげで、この大きな節目を迎えられたことを深く感謝申し上げます。

財団法人鎌田共済会は、政治家・事業家として活躍していた鎌田勝太郎<元治元年(1864)~昭和17年(1942)>により、大正7年(1918)3月に設立されました。

設立の動機は、第一次世界大戦(1914~1918)の影響による物価高騰等で困苦する人びとが増え、その救済のために慈善・育英・各種社会教育事業を行うべきであると考えたことにあります。発足に際して作成された『財団法人鎌田共済会寄付行為』(定款)の第1章 総則には「鎌田勝太郎ノ生前処分ニ因ル寄附行為ヲ以テ財団法人ヲ設立ス」、第2章 目的には「慈善事業育英事業及學術技芸ノ研究ニ資スルヲ目的トス」と記されています。

初年度の大正7年6月には慈善事業として、中讃地域の困窮者の救助やその苦悩の緩和を図るとともに、家計が苦しく学用品の購買が意のままにならない子供に学用品を給与、翌年4月には県内の人材育成を目的とした学資金貸与を開始しました。また同11年9月には図書館を設置して読書生活を奨励、さらに同年10月には調査部を設けて、郷土関係史料の蒐集、および調査研究を行ないました。そして、大正14年5月には、人びとがさまざまな史料に対する理解を深め、利用愛好する習慣を養うことを目的として郷土博物館を開設しました。その他にも、社会教育館(昭和2年)や武道館(昭和9年)を設立するなど、學術技芸の奨励や公益事業の援助を行なってきました。

創立から100年、時の流れとともに社会情勢は激変し、人びとの価値観も大きく変わりました。しかし、当会はこれからも、一世紀にわたり郷土と共に歩んできた歴史を大切にしながら、事業の継続、充実を目指してまいりたいと考えております。今後も、皆さま方の深いご理解と温かいご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

鎌田共済会理事長 鎌田 武雄

お祝いのことば

鎌田共済会の奨学金と武蔵野般若道場・淡水寮 元衆議院議員 森田 一

鎌田共済会が創立100周年を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。

創立者の鎌田勝太郎氏は、国会議員をつとめるかたわら、鎌田共済会の発展に尽くされました。その努力は鎌田正隆氏にも引き継がれ、正隆氏は涙ぐましい努力研さんをなさいました。

私は26年間衆議院議員を努めました。鎌田正隆氏には後援会の会長をしていただきました。私はこの世に生を享けている限り、年1回の鎌田共済会の会合に出席する覚悟をしております。事実これまで欠席したことはございません。



私の両親は開業医で父森田豊は内科、母なすゑは眼科の医者でした。私達2人を育てるため私の大学進学時期に開業していたのは父のみで母は開業していませんでした。父は無愛想なこともあり、1日の患者の数は4、5人で家計はかなり苦しい状況でした。父の言い分は医者になるためには、インターンも含めれば7年かかり、それだけ学費がかかる。もし浪人すれば1年分の学資が余計かかるうえ、心配もしなければならぬからというものでした。父は自分と同じく京都大学医学部にすれば必ず現役で入学できるだろうというのでした。1年間言い争ったあと100パーセント現役で入学するからと約束して東大を受験することになりました。その様子を見ていた祖母マサは、家計を助けるため鎌田正隆様をお願いして奨学金を出していただくことと予定通り大学に進学したら、武蔵野市吉祥寺にある武蔵野般若道場に附属している淡水寮に入れていただくこととお許しいただいたのでした。

武蔵野般若道場は鎌田共済会により、武蔵野市吉祥寺に設立され、初代の師家は釈定光老師でした。私がお仕えした師家は苧坂光龍老師で、老師は東大、京大の印度哲学科を卒業されております。香川県のご出身でその実兄の松本昇氏は資生堂の2代目の社長です。

私は予定通り、大学に進学し、武蔵野般若道場附属の淡水寮に入りました。寮費は月500円という安価なもので、15名位の学生を収容していました。寮生は5時に起床し、1時間坐禅した後、作務という名の掃除などの作業をした後で朝食を摂り学校へ行くのです。坐禅の際には希望者は入室といって師家と禅問答をすることが可能でした。朝食と夕食は交代でごはんをたき、朝食の時には味噌汁もつくりました。月の始めには摂心という坐禅会が朝4時から2時間あり、この時には外部の民間の人も多く参加しました。12月にはこれをもっと大規模化した大摂心というのが行われました。いずれにしてもこれらは在家仏教としての活動です。

私は鎌田共済会からの奨学金(育英会などからももらっていましたが)と淡水寮のおかげでアルバイトすることなく勉学に励むことができました。アルバイトをすると働くのに時間をとられ、そのお金を使って何かをするとそれにも時間をとられるからです。そのおかげで2年生の終わりに学校からいただいた通知には理科Ⅱ類408人のうち1番で医学部はもちろんのこと何学部へでも進学できるとありました。

運命のいたずらとはこのことです。1番と4、5番では平均点で言えば0.1か0.2点の差だったと思われませんが、4、5番だったら医学部へ行ったでしょう。しかし1番ということで考え込んで結局法学部へ進学して大蔵省をめざすことになりました。

そして目的通り大蔵省に入りましたが、ここでまた運命が変わることになったのです。すなわち大平正芳の娘と結婚し、しかも大平の長男正樹が26歳の若さで他界したため、大平外務大臣の秘書官となり大蔵大臣秘書官、総理大臣秘書官を務め大平総理他界後跡を継いだのです。そして26年間国会議員として過ごすこととなりました。このように私の人生の起点に鎌田共済会の奨学金と武蔵野般若道場淡水寮があったのでした。

大正8年より始まった共済会の奨学金事業は、対象者、基本月額、貸与から給付へ等の変遷を経ながら、現在も継続して行われており、これまでの奨学生の総数は2,231名にも及ぶということです。

郷土坂出と共に歩んできた100年を大切に、今後の100年も郷土に寄与し続けることを期待するとともに、鎌田共済会のますますのご発展を心から祈念いたします。

第1展示室

ノートゲルト・コレクション

ノートゲルト (Notgeld) は、20世紀初頭の1914から1924年の間に、現在のドイツ・オーストリアを中心に流通した、地域通貨です。

第一次世界大戦(1914~1918)の影響により金属が軍需にまわされ、庶民の日常生活に必要な小銭が不足しました。それを補うため、緊急貨幣としてノートゲルトが発行されたのです。有効期限があり、期日がきたら法定通貨と交換する仕組みです。紙幣には、発行元が貨幣の価値を保証することや引替期日、偽造を禁じる文言などが記されています。主に地方自治体から発行されていましたが、私企業や小売業者、財団等からも発行され、数万種以上あるといわれています。

ノートゲルトが出回り始めた当初は、実際に運用されていましたが、やがてコレクターの目にとまるところとなり、蒐集目的で買い求められるようになりました。コレクションされると引替期日がきても換金しないので、発行元の収入が増えることとなります。そのため、コレクターをターゲットに、趣向をこらしたデザインのノートゲルトが、次々と発行されるようになりました。

図案は、その地域の象徴となる城や教会をはじめ、多彩なテーマがモチーフとされました。図①は、ドナウ川沿いにたたずむシェーンブルン修道院が描かれ、図②は街の名物であるドーナツが、大きくあしらわれています。図③では、紙幣をついばみ金貨を排出するワシを描くことで、結局のところノートゲルトをつかまされている国民が、その財産を行政に搾取されていることを、皮肉をこめて表現しています。図④は、木こりが聖母マリアに祈ると奇跡的に怪我が治ったという、地名の由来になった伝説のワンシーンが、デザインされています。

世界最小の紙幣とも言われているノートゲルトにはそれぞれ個性があり、眺めているだけでその土地を旅しているような楽しい気分になれることから、現在でも根強い人気があるようです。

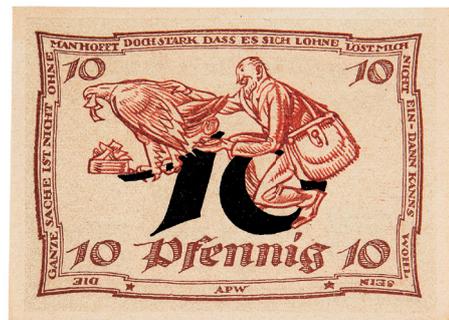
(宮武 尚美)



▲図① シュピッツ (Spitz)
[オーストリア] 発行 6.0×7.8cm



▲図② エーベルスヴァルデ (Eberswalde)
[ドイツ] 発行 5.8×8.5cm



▲図③ アルンシュタット (Arnstadt)
[ドイツ] 発行 5.9×8.1cm



▲図④ マリア・ターファール (Maria Taferl)
[オーストリア] 発行 6.3×8.6cm

第2展示室

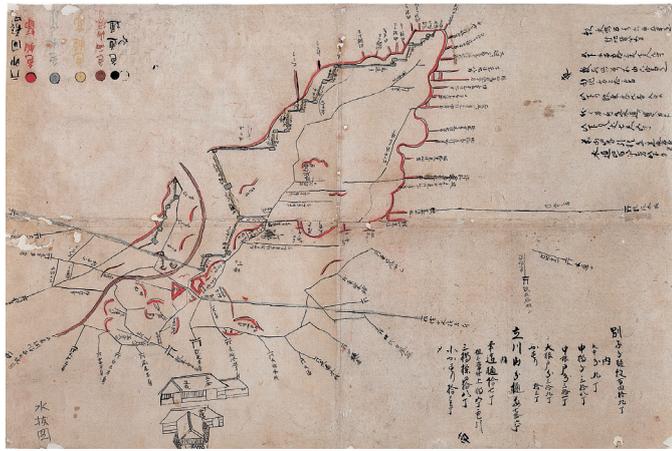
久米通賢の足跡をたどる — 別子銅山行 —

久米通賢は坂出塩田開発の初期の仕事として文政9年(1826)1月末、予定地の測量に着手します。同じころ、通賢のもとを別子銅山の関係者が訪れました。

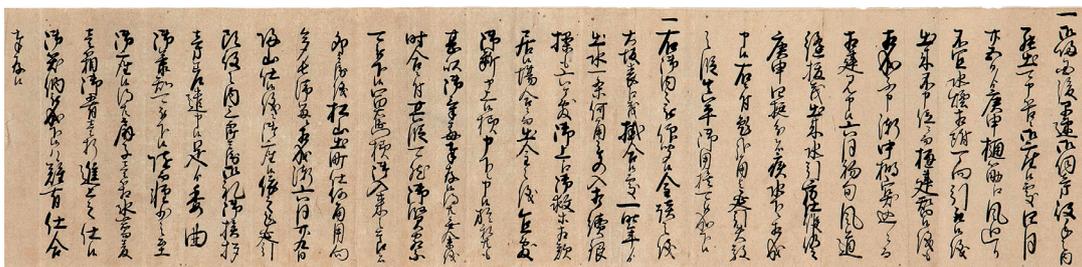
別子銅山は伊予(愛媛県)東部にあり、大坂の銅商人住友(屋号泉屋)が経営する大銅山で、その産銅は長崎からオランダ・中国へ輸出されていました。

銅山では前年の文政8年(1825)3月から、当時の主要な採掘現場の三角で湧水が始まり、箱樋(人力によるポンプ)で排水に努めた結果、一時減水したものの、12月に新たな場所から大規模な出水があり、9年の夏～秋には辺り一帯が水没しました。

このような銅山経営の重大な事態に当面して、別子銅山側が何らかの新たな排水策を通賢に求めたと思われます。文化13年(1816)大坂で“養老滝”と名付けた大型の揚水機を見世物にして評判をとった発明家に期待するものがあつたのかもしれませんが。通賢は状況を理解したものの、墾田事業が始まったばかりの忙しい時期でもありすぐに直接的行動をとることは出来ませんでした。1年以上も過ぎた文政10年(1827)4月ようやく別子銅山に向かい、現地を見分し、鋪(坑道)内を測量、鋪内の様子がよくわかる絵図(図1)を作成します。通賢は、それをもとに樋の設置場所や排水路について提案したものの、事態を収束させることは出来ませんでした。そして両者の密接な関係もその後まもなく終わったことが、別子銅山から久米宛てに送られた文政10年閏6月の連署状(図2)によって窺えます。



▲図1 別子銅山水抜図 (52.5×77.9cm)



▲図2 久米通賢宛今沢・服部・三木連署状(部分)

今回の展示では、当館で所蔵する文政9年から同10年にかけて、別子銅山関係者と久米通賢および周辺の高松藩士との間、それぞれに交わされた書状を中心に紹介します。銅山側が何を求めて招聘したか通賢がそれにいかに答えたかを書状の中に追っていきます。そこには、別子銅山の現況だけでなく、当時の通賢のおかれた状況が垣間見えてきます。また、銅山関係の絵図のほか同じ時期の坂出墾田事業の資料を展示しています。本展によって久米通賢の別子銅山行きの顛末、文政期の別子銅山の動静の一端について知っていただければ幸いです。

(廣瀬 永津子)

【参考文献】

『住友別子銅山史』住友別子鉱山史編集委員会 平成3年5月

第3展示室

江戸時代の旅

庶民の間で、「楽しむための旅」が盛んになったのは戦乱の世が遠ざかった江戸時代中期のことでした。安永5年(1776)に長崎オランダ商館長の侍医として、江戸参府に随行したカール・ツンベルクの『江戸参府随行記』には、「この国の道路は一年中良好な状態であり、広く、かつ排水用の溝を備えている」などと街道の様子が記されています。江戸時代初期の参勤交代制度により、主要な街道や宿場が整備されていたこともあって、前代よりも数段安全で快適な旅が実現可能であったことも大きな要素と考えられています。

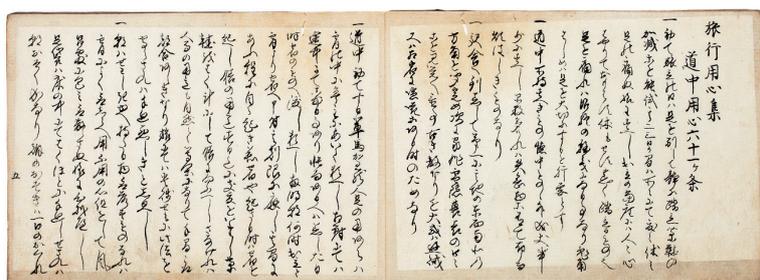
とはいえ、国から国への移動に厳しい制限のあった庶民に許されていたのは、信仰を目的とした旅でした。伊勢神宮を始めとする寺社詣での旅が盛んになり、旅人は神仏崇敬に名を借りつつ、名所巡りや美酒佳肴を堪能したようです。神社仏閣を巡る、温泉に入る、景色を楽しむ、美味しいものを食べる、お土産を買う、という現代につながる物見遊山の旅は、この頃にはすでに成立していたことになります。

さらに江戸時代後期になると、平和な世が続いたことから、人びとの暮らしはより楽になり、楽しさも求められるようになって、庶民文化が花開きます。観光をテーマにした出版物も次々と刊行され、遊興性を帯びた旅が大ブームとなりました。

八隅蘆菴の『旅行用心集』(文化7年・1810・刊)は旅における基本的な心構えやポイントを綴った名著とされ、刊行するやたちまち、ベストセラーとなりました。また、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』(享和2年・1802～文化6年・1809・刊)や、初代歌川広重によって風光明媚な風景や名所旧跡などが描かれた『保永堂版 東海道五十三次』(天保4年・1833～同5年・1834)の版行も大きなきっかけでした。

今回の展示では「道中記」、「名所図会」、「道中案内記」をはじめ、「浮世絵」や「絵図」、また、難船の憂き目にあった際の「漂流記」などから、「江戸時代のさまざまな旅」をご紹介します。これらの資料からは豊かな、時には苛酷な自然の中で旅をした当時の人たちの大らかな笑顔や逞しさと共に、苦勞も伝わってくるようです。

(吉久 由紀子)



▲『旅行用心集』(文化7年・1810・刊)写本



▲「日本橋」
『東海道五十三次』より



▲『金毘羅参詣名所図会』
(弘化3年・1846・刊)



「江戸中期の讃岐の名医 合田強」

-『解体新書』の以前に書かれた『紅毛医言』-

第8回公開講座から

板野俊文(香川大学名誉教授)

はじめに

合田強の『紅毛醫言』は『解体新書』の発刊に先立つこと12年前(宝暦12年:1762)に書かれた「蘭方内科に及ぶ者としては嚆矢である(新撰洋学年表)」として一部では、知られている。これはオランダ大通詞の吉雄耕牛とその弟蘆風の口述を合田強が書き写し、五巻として残した「紅毛醫述」等を、別に一巻としてまとめたものである。この写本は呉秀三の所蔵であったが、それも失われ、現在残っているのは、呉本の写本、鎌田共済会郷土博物館所蔵本(昭和4年に写)のみである。

今回はこれらの残された本を解説し、合田強の業績について、講演を進めていった。

登場人物の略歴

○合田 強(通称:求吾、温恭先生)

享保8年(1723)生まれる

宝暦2年(1752)29歳 2年間 京都 松原一閑斎に師事『醫道聞書』(鎌田共済会郷土博物館所蔵本)による。

宝暦6年(1756)33歳 4年間 江戸、京都、姫路『醫道聞書』による。

宝暦12年(1762)39歳 6か月 長崎『紅毛醫言』など 計6冊

安永2年(1773)4月死亡 51歳

○吉雄 永章(通称:幸左衛門 号:耕牛)

享保9年(1724)生まれる

幼い頃からオランダ語を学び、元文2年(1737年)14歳のとき稽古通詞、寛延元年(1748年)には25歳で大通詞となった。年番通詞、江戸番通詞をたびたび務めた。当時の多くの蘭学者は、耕牛の教えを受けている。また蘭方医としても名声をはせたが、自説を守り、出版物はない。そのため、合田強の残した講義録等が重要である。

寛政12年(1800)死亡 77歳

○吉雄 永純(号:蘆風)

享保10年(1725)生まれる

江戸中期の阿蘭陀通詞。阿蘭陀通詞吉雄藤三郎の子で幸左衛門の弟。別家をたてる。寛保2年(1742)稽古通詞、宝暦8年(1758)小通詞末席、明和3年(1766)小通詞並、同8年小通詞助役となる。

安永6年(1777)10月4日死亡 53歳

「紅毛鑿言」の内容

講義録五巻をまとめて、一巻とし出版を行おうとして果たさなかったと考えられる。図1に博物館所蔵本の表紙を示す。

序言(原文は漢文で永富独嘯庵が書く。)

凡例(原文は漢文で合田強が書く。長崎に行き、吉雄耕牛に和蘭医学を学ぶようになった経緯や、本書の構成等についても述べている。)

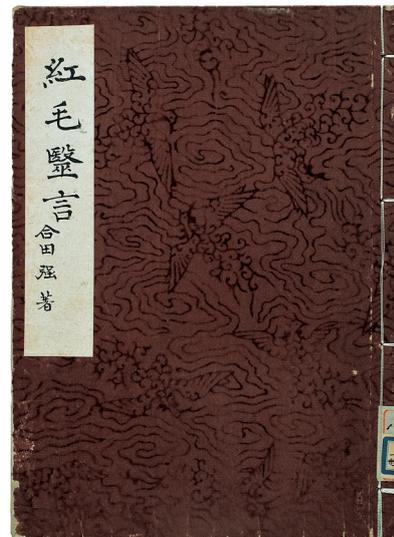
汗吐下法(古方医学にもある、汗をかかせ、悪いものを吐かせる、又下すと云う方法について、和蘭医学流に解説している。)

刺絡(瀉血)法(悪い血をだすという概念で始まった取血法で、かなり詳しく書かれている。後述のハイステルの『外科学教程』を参考にしたと考えられる。)

熱病の概略と治療法(当時の日本では稀であったと考えられるマラリアについて解説し、薬物療法についても述べている。)

疫の概略と治療法(感染症の概要について述べ、各種の薬物療法についても書いている。)

薬方(各種諸疾患に関する和蘭渡りの薬物を列挙し、その効能、製法、用法等について解説している。)



▲図1 「紅毛鑿言」
鎌田共済会郷土博物館蔵

講義録の内容

五巻の講義録には一巻ごとに名前が付されている。その理由は、その内容を見ると理解される。つまり巻ごとに書かれている内容が異なり、内科、外科、刺絡、薬草、薬方と多岐にわたる為である。括弧は筆者の説明である。

- ・第一巻 阿蘭陀内治書(見え消し)紅毛鑿述 熱病(コオルツ)、瘡(かさ)、腫脹(ヘイドロピークス)、石淋(腎臓等の結石)、疝気(コレイキ:腹の痛み)、痢(ヂアセンテリア:腹下り)、狂犬病、梅毒(スパンスポク)
- ・第二巻 紅毛鑿言 狂(マニア)、卒中風、傷寒(ヘブリス:高熱を伴う急性疾患)、小児積気、咳嗽、咯血、宿食、中風(パラレイジス)、疫(ペスラス)、小便閉、黄疸、翻胃、嘔吐、吐血
- ・第三巻 紅毛鑿言(見え消し)西洋鑿述 卒倒、瘰癧(カンカル)、小児遺尿、(解剖図多数)
- ・第四巻 西洋鑿述 小産、癩症(メランコウリア)、閉経、帯下、癩、癩、労瘵(テイレギ)、痞積(ミルトシュリト)、小児頭瘡、痘、疹(マアゼレン)
- ・第五巻 西洋鑿述 咽頭痛(アンギイナ)、取血、シキウルボイコ

『解體新書』が解剖のみであるのに対して、臨床医学全般にわたった書であることが大きな特徴である。

講義録第三巻の解剖図の原典

第三巻では解剖学や外科学の内容が、図を交えて多く書かれている。解剖図をみると、『解體新書』の図とは全く異なっており、その原典が何によるかがわからなかった。その後、外科学の当時の教科書を調べていると、多くの図に共通点があることが判った。以下にそれについて述べる。

原作者は「ドイツの外科学の父」と呼ばれたハイステルである。略歴は以下を参照されたい。
ローレンツ・ハイステル(Lorenz Heister, 1683年9月19日 - 1758年4月18日)ドイツの解剖学者、外科医また植物学者である。

ハイステルは解剖学と外科学の教科書を残しているが、共に当時のベストセラーで、ドイツ語は当然としてイタリア語、フランス語、ラテン語、英語、オランダ語に翻訳されている。

図2、3、4にその一部を示した。これの内『外科学教程』は、後に杉田玄白起業、大槻玄沢翻訳の『瘍醫新書』として発刊されるが、合田強の記録は、その数十年前の事である。

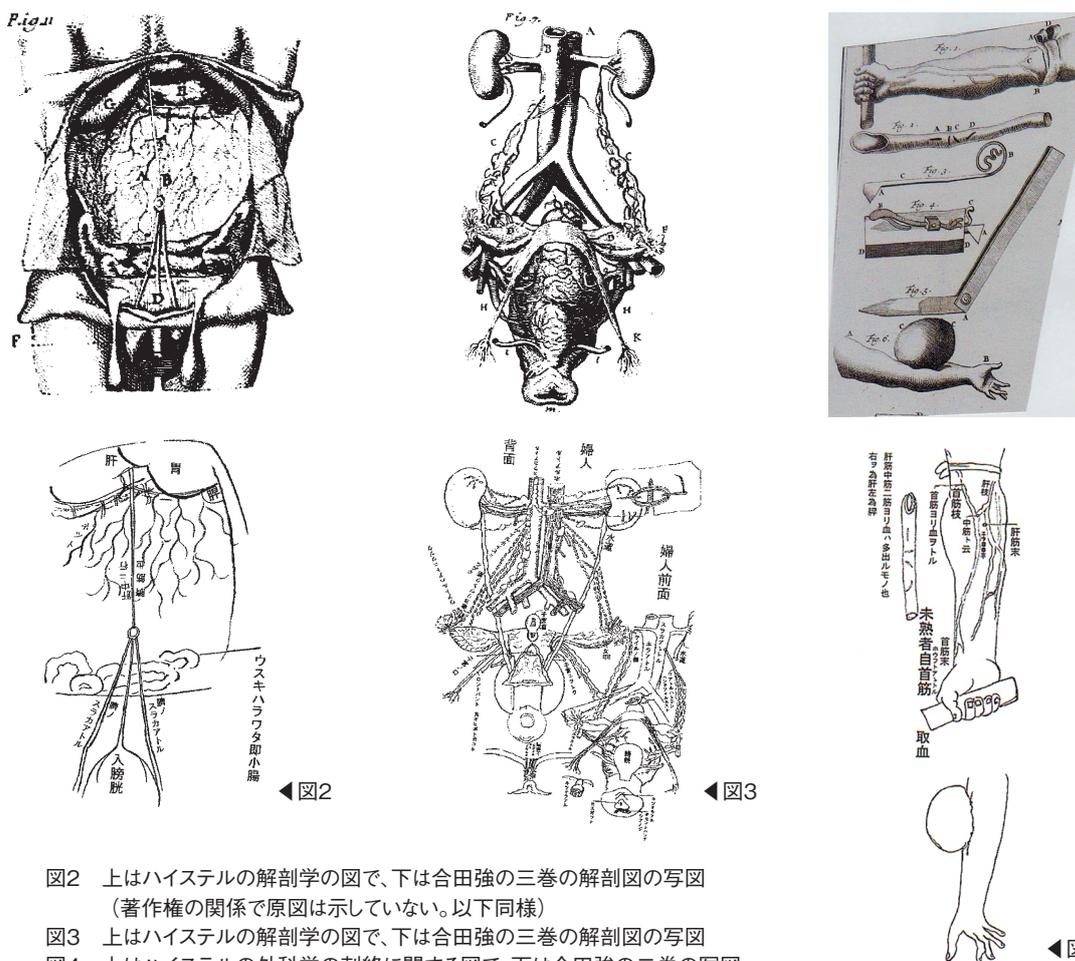


図2 上はハイステルの解剖学の図で、下は合田強の三巻の解剖図の写図
(著作権の関係で原図は示していない。以下同様)

図3 上はハイステルの解剖学の図で、下は合田強の三巻の解剖図の写図

図4 上はハイステルの外科学の刺絡に関する図で、下は合田強の二巻の写図

まとめ

鎌田共済会郷土博物館所蔵の合田強の『紅毛鑿言』と講義録五巻の概要、および三巻の解剖学、外科学に関する部分について、解説した。

時間の関係で、内科に関する部分は説明できなかったが、蘭学研究者の間では、むしろ蘭方に内科があることを最初に示したことで有名であった。

また、合田強の弟の合田大介は外科が専門で一家を成したが、今回は話せなかった。しかし、当時としては最新の外科技術を有していたと思われる。

謝辞 写図の作成に関しては香川大学名誉教授 田中健二先生による。



『輝安鉱』について

(表紙解説)

輝安鉱は鉛灰色で金属的光沢をもつ、硬度2の軟らかい鉱物です。当館所蔵の輝安鉱は愛媛県の市之川鉱山から産出したもので、昭和初期に当時の新居浜市西条町在住の博物研究者田中大祐(1872~1956)によってもたらされました。氏は花火師の仕事の傍ら博物研究に邁進し、中でも鉱物の採集発見の分野で学界に貢献しました。自らの所蔵標本のすべてを関係機関に寄贈したと言われており、当館の輝安鉱も、氏の出身地(香川県観音寺市)の縁によるところがあるのかもしれませんが。

市之川鉱山は愛媛県西条市市之川にあります。現在、採掘はされていませんが、坑口は丸野川の両岸、標高150mから400mの地点に東西1200m、南北800mの範囲で分布しています。江戸時代の延宝7年(1679)、近隣の大浜の庄屋曾我部親信が鉱脈の露頭を発見したことにより開坑されました。以来、断続的に昭和32年(1957)まで採掘がおこなわれていましたが、その最盛期は明治中ごろと考えられます。

採掘された鉱石は、選鉱、製錬の過程を経てアンチモン地金となり、明治・大正期には鉛や銅との合金にして活字として使われたほか、砲弾の部品用の需要が多かったです。

また、同鉱山から産出した輝安鉱の美しく大きな結晶は明治10年(1877)に東京上野で開かれた第1回内国勧業博覧会、同11年のパリ万国博覧会、同26年のシカゴ万国博覧会に出品され好評を博しました。現在は標本として大英自然史博物館(イギリス)、スミソニアン博物館(アメリカ)、国立自然史博物館(フランス)、鉱物・地質学博物館(ドイツ)等世界各地の主要な博物館で収蔵展示されています。このようなことから、市之川鉱山から産出した輝安鉱は日本を代表する鉱物といわれています。

(廣瀬 永津子)



▲市之川鉱山 千荷坑坑口

INFORMATION



■ つまみ細工体験講座

平成30年7月28日(土)
13:30~15:30(開場13:00)
会場:鎌田共済会郷土博物館2階講堂
講師:榎橋利恵(はな華工房)
【申込7月3日(火)から、先着30名、参加料500円】
※小学校2年生以下の方は保護者同伴
電話またはFAXでお申込み下さい。
電話:0877-46-2275 FAX:0877-45-0035

■ 刊行のお知らせ

『久米通賢と別子銅山 -書状を中心に-』
別子銅山行きを経緯を、残された書状の解読を通じて明らかにしたものです。 ※お問合せは当館まで

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間: 午前9時30分~午後4時30分 (入館は4時まで)
休館日: 月曜日 / 祝祭日
夏季特別 (8月13日~15日)
年末年始 (12月29日~1月4日)
入館料: 無料



▲表紙資料裏面 (29.2×41.5×7.5cm)

参考文献

- ・今井典子「30 市之川鉱山」『近代遺跡調査報告書—鉱山—』文化庁文化財部記念物課 平成14年
- ・『愛媛県史 人物』愛媛県史編さん委員会 平成元年